



ありのままを受け入れ、共に生きる

国連大学と環境省によって国際的に推進される

「SATOYAMA イニシアティブ」に携わってきた著者が、

浦戸諸島の復興への関わりを通じて発見した「自然と生きる」暮らしとその生きる姿勢とは――。

文：東京大学大学院 農学生命科学研究科 国際水産開発学研究室 特任研究員 簗原茜

千年に一度の災害、乗り越えた知恵

宮城県塩竈市の浦戸諸島（桂島・野々島・寒風沢島・朴島）は、日本三景松島に浮かぶ人口400名ほどの小さな島々です。牡蠣・海苔の養殖や刺網漁を生業とする傍ら、島のお母さんたちが畑で野菜を作り、天水で育つ田んぼがあるなど、豊かな里山・里海の生活が営まれてきました。

2011年3月11日、そんな平和な島時間を切り裂くように、大津波が浦戸を襲いました。津波は島々を呑み込み、浦戸全体で3名の方が行方不明となりましたが、高齢化が進んだいわゆる限界集落であるにも関わらず、人的被害をそこまで抑えることができたのは奇跡だと言われました。しかし、それは島コミュニティを強く結びつけている家族同然のつながりがあったからだ、震災後島に通い続ける中で私は確信を深めていきました。自宅には鍵をかけず、「おすそわけ」を持ってお互いの家を行き来し、何か困ったことがあったらなりふり構わず手を差し伸べる、そういった助け合いの文化が日常的に存在していたからこそ、地震発生直後、土足で家に上がり込み、嫌がるお年寄りの手を引いて軽トラックの荷台に乗せ高台まで避難させ、長く辛い避難所生活も一丸となって乗り越えられたのだと思います。

自然と隣合わせで生きるということは、その土地ならではの恵みを享受できると同時に、多かれ少なかれリスクを負うことを意味します。浦戸でも、東日本大震災の前年はチリ津波によって養殖筏が大損害を受け、さらにその前年



海苔の作業を一体みしておしゃべりする島の人たち

には、猛暑の影響で多くの牡蠣が死滅しました。しかし、島の皆さんはそんな厳しい現実も含め、自然のありのままの姿を受け入れ、それに向き合いながら島での生活を続けていらっしやいます。何十年と牡蠣を作り続けている生産者の皆さんの「自分は毎年1年生だ」という言葉にも、そういった思いが込められているような気がします。千年に一度といわれる未曾有の災害時も、人の命を守り、再び立ち上がること（bounce back）が十分可能であるということ、浦戸の人たちは身をもって証明してくれました。

津波がくる方向は明らかにも関わらず、現在浦戸では島を取り囲むような防潮堤の建設が計画されています。まずは身の回りの自然をよく理解した上での避難体制の確立といったソフト面の強化、それをサポートする避難道の整備などハード面でのバックアップ、そして、日頃から人と人のつながりを大切にすることが必要ではないでしょうか。

島の教訓を世界へ

浦戸の教訓は、2014年8月に、東京大学、ロードアイランド大学（米）、台湾海洋大学、アムステルダム大学（蘭）、アールボーグ大学（デンマーク）の五大学合同で実施した三陸沿岸での国際サマーセミナーにおいても、国内外からの参加者の心に深く刻み込まれました。国籍も専攻もさまざまな学生グループからは、沿岸コミュニティにとって希望の持てる復興に向けたアプローチとして、ブルーカラーならぬ「グリーンカラー」の創設や、景観やレクリエーション性を考慮しつつ実用的な防潮堤デザインなど、Eco-DRRの要素が散りばめられたユニークな提案が多く出されています。

今年3月には、仙台で第3回国連防災世界会議が開催されます。まずは地元から生きた教訓を学び、それがハイレベルな場でも反映され、地に足の着いた現場に還元される議論が展開されることを切に願います。

簗原 茜（みのはら あかね）

東日本大震災以降ご縁のあった浦戸諸島で、島の人と自然を活かした復興、特に島のお母さんたちとの「島のおすそわけ」プロジェクトに精力的に取り組んでいる。前職は国連大学で SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ (IPSI) 事務局を務めた。